



年間購読料 (送料込み) 1500円

編集・発行 伊藤俊男

子どもの本専門店

ピッポ

〒424-0886 静岡市清水区草薙1-6-3

TEL & FAX 0543-45-5460

URL <http://www.pippo.co.jp>E-mail itoh@pippo.co.jp

おじさんの言いたい放題！
拡大版

ちかごろ「世界遺産」が、テレビや雑誌に登場することが多い。はたまた内外を問わず世界遺産への観光ツアーも盛況なようで、いまや一大ブームの観がある。先頃も「石見銀山遺跡」が世界遺産に登録されたと、にぎやかだ。かくいう、ぼくもテレビで時々「世界遺産」という番組を楽しんでいる。

これまで、日本の世界遺産への登録は、今回の「石見銀山遺跡」を入れて、すでに14（自然遺産3文化遺産11）個所になるという。これらの場所は、それぞれに観光客が殺到している和新聞は伝えている。

この国の人たちは何故こうまで世界遺産というお墨付きをほしがるのだろうか？おもうのだが、世界遺産登録を目指している連中は、それによって何らかの現世利益を期待しているのではないだろうか？こういうひとたちは、ユネスコの世界遺産への登録が、何を目的としているかを再度思い返す必要がある。

この静岡県でも、今や官民揚げて「富士山を世界遺産に！」という運動を展開している。そりゃ、静岡に生まれ育ち、子どもの頃から折に触れて富士山を見上げてきた一人として、富士山は美しいと感じるし、誇りにも思う。しかし、何かこの運動には違和感を覚えるのだ。

以前 富士山は自然遺産への登録を目指したが、環境破壊のすさまじさと、あまりの観光地化を理由に失格したのである。今回は文化遺産としての登録を目指しているのだそうだ。

確かに富士山は万葉の時代から折に触れ、歌に読まれたり、絵に描かれたり、信仰の対象などとして日本人の心に生きてきたことは間違いない。これからも、それは変わらないだろう。

それだけでいいじゃないか！

無理に世界遺産に登録を目指して、税金を使って運動を展開しなかつてき。

ぼくがもしユネスコの世界遺産選定の委員だったら（そんなことありえないけど）、富士山は絶対世界遺産への登録はしないな。

その最大の理由は、広大な軍事基地（自衛隊の東富士演習場や米軍のキャンプ場）がいまだに存在し、自衛隊や米軍が射撃訓練をやっているんだぜ。現役の軍事基地を有している場所が文化遺産としてふさわしいかどうか小学生だって判断できることだ。税金の無駄遣いはやめるべきだ。

こつこつ発想と論理は、いらないと解っているのに「静岡空港」を強引に作るのとまったく同じである。

本気で富士山の世界遺産への登録を目指すのだったら、官民揚げてまずは軍事基地撤去運動から始めるのが本当だし、近道だと思ふな。

世界遺産と言えば、爆笑問題の太田光が中沢新一と出した「憲法9条を世界遺産に」（集英社

新書 693円)という対談集はいい。

発想がいいじゃないか!

多くの人はこのタイトルを目にいれば、「はっ!」とするんじゃないかな?少なくとも、ぼくは虚を衝かれたおもいがした。

これを「ユーモア」だと思っ人もいるだろうし、「皮肉」と思っ人も「ふざけるな!」と思っ人もいろいろいるだと思っな。それそのものの方考え方のちがいによって、どんな風にもとれるものね。そこがこの発想のすばらしいところなのだとおもっな。

対談では、あえて宮沢賢治と田中智学(田中智学は「国柱会」を興した。侵略戦争の思想の基になった「八紘一宇」との関係で語られることが多い。賢治は国柱会に一時入り、彼の影響を強く受けた)の関連などを持ち出し、問題を鋭く提起している。

素晴らしいと言え、憲法9条にノーベル平和賞を」という運動もある。この発想もいいと思っな。

阿部首相は「戦後レジームからの脱却」を旗印に、憲法9条の改悪をまくろんでい。9条の根幹は戦争の放棄である。このことは人類の究極の目的でもあるだろう。しかし、阿部首相は、この「戦争の永久放棄」を放棄し、戦争のできる国にすることを改憲の最大の目的にしているのだ。このことに使われるフレーズが「この国を普通の国に」である。

もし、この「憲法9条」がノーベル平和

賞を貰えば、いくら阿部首相でも改悪しようとは言い出せないだろう。だって、日本人はノーベル賞にとても権威を抱いているのだから。

日本は戦後60年、この憲法を掲げること、世界に対して人類の理想を高らかと歌いあげてきたのである。また、そのことで栄えてもきた。

と、まあ、ここまで憲法について書いてきたが、このまま続いていると、また子どもの本からそれてしまいうである。方向を子どもの本に強引に転換することにした。

話を子どもの本に戻して

ちょうどノーベル賞が出てきたので、ノーベル賞の国スエーデンの子どもの本を少し紹介しよう。

スエーデンといえば、思いつくままにあげると『ムーミンシリーズ』のトーベ・ヤンソンや絵本『ペレのあたらしいふく』などのエルサ・ベスコフなど頭に浮かぶ。

さきごろ福音館から出た『ニルスのふし

ぎな旅 上・

下』(セルマ・

ラーゲルレー

ヴ・作 菱木

晃子・訳 ベッ

ティール・リー

ベック・画

各2415円)

は、とても長い物語である。『ニルスのふ

しぎな旅』といえば、遠い子どもの頃の記憶では、雑誌に載ったわずか数頁のもので、鳥の背中に小人のニルスが乗って冒険をするというものでしかなかった。今度初めてこの完訳本を読んで、長編で豊かな内容であることを知った。

この本を書いたラーゲルレーヴは女性で初めてノーベル文学賞を貰った作家だとい

う。物語は、悪ガキのニルスがトムテにイタズラをして小人に変えられてしまう。そこでガチヨウのモルテンといっしょにガンのアツカの群に混じってラップランドまで空の旅へ出発し、戻ってくるまでの冒険を描いたものである。内容は、いくつもの話の積み重ねで、ニルスが経験あるいは見聞していく過程で、成長するというものである。

訳者後書きによると、これは作者が子ども向けの地理の教科書として依頼されたもので、スエーデンの地域や地形や歴史などが表現豊かに描かれている。

よくスエーデンは美しい国だと言われるけれど、この本を読んでそのすぐれた情景描写を通じ理解できた。

この本が優れた子どもの本として、何故いまだに世界中で読み継がれているのか?それは、内容が子ども本としての要素を遺憾なく有していることにあることを実感できた。

この夏の一冊としておすすめしたい。

スエーデンといえば、もう一人リンドグレーンを忘れるわけにはいかない。



ニルスのふしぎな旅(上)

リンドグレーンの作品には、『長くつしたのピッピ』



(大塚勇三・訳 1785円)のシリーズの主人公で世界一力持ちの女の子ピッピや、『やか

まし村の子どもたち』(大塚勇三・訳 1995円)のリーサ・ラッセ・ボッセなど6人の子どもたちや、『おもしろ荘の子どもたち』(石井登志子・訳1995円)のマディケンとリサベットの姉妹や難事件をつぎつぎ解決する『名探偵カツレくん』(尾崎義・訳 1995円)カツレなどという愛すべき子どもたちがいっぱい登場して、ある時はイタズラを、ある時は愛らしい大失敗を、ある時は大人顔負けの大活躍をして、読者を魅了してやまないのである。だから、子どもも大人もリンドグレーンは大好きである。

リンドグレーン(1907~2002)は今年生誕100年だという。リンドグレーンの本を一番たくさん出している岩波書店はこれを記念して、新たにリンドグレーン関連の本を5冊出版するそうだ。その内2冊はこの7月に出る。

『やねの上のカールソンだいかつやく』(石井登志子・訳 2310円 7月10日発売予定)

『遊んで遊んで リンドグレーンの子ども時代』(クリスティーナ・ビヨルグ・文

エヴァ・エリクソン・絵 石井登志子・訳 7月27日発売予定)
この夏ピッピでは、リンドグレーンの作品を全点揃えます。是非リンドグレーンの世界を楽しんでください。

ねー、この本読んだ?
とびっきりの夏の絵本4冊



『さんねんごい』(菊池日出夫・作 840円 福音館書店)この作者が「のらっこえ絵本」のシリーズとして何冊か出した1冊。この絵本に描かれている子どもたちは、田舎の子どもたちの原風景である。こういう自然の中で至福の子ども時代

を過ごして大きくなる子どもたち、今ほどのくらいいるのだろうか?こういう時間と空間を子どもに保証するのがおとなの役目だと思ふな!残念なことは、この絵本を7月で絶版になるそうだ。



『みずまき』(木葉井悦子・作 1890円 講談社)真夏の昼下がりに、庭に出てホースで水撒きをしたら、庭の住民がうごめきだしたぞ。やつぱりお終いは自分もみずび

たし...。木葉井さんの絵本にはいつだって小さな命が登場して「生きてるの人間だけかよ」って、叫んでいるようだ!



『海べのあさ』(マツクロスキー・作 石井桃子・訳 1765円 岩波書店)子どもの歯が抜けたことを題材に、マツクロスキー一家の夏の朝のでき

ごとを描いている。朝目覚めたサリーは歯が抜けそうなのに驚く、これに対する両親の対応が素敵だ。そこかしこにマツクロスキーのユーモアが溢れている。大人の子どもの対する暖かさが嬉しい絵本でもある。



『星空キャンプ』(村上康成・作 1890円 講談社)湖の畔で1週間のキャンプ。自然のなかで過ごす時間はユッタリと、優しく流れていきます。

自然に寄り添って過ごす自然は、様々な姿を見せてくれるものですね、村上さん。デモね。1週間の休みつてのは夢のまた夢なんだな、ぼくにはさ。だから、せめて絵本の中で自然との1週間を過ごそつと...

山里からの便り 佐久間雅哉 セブリー舎のネイチャースクール

皆さんご無沙汰しております。セブリー舎ネイチャースクールを初めて2年たちました。観光地でもない山村をフィールドにして、はたしてどのくらいの参加があるのか見当もつかない中でスタートでしたが、おかげさまでポチポチやっております。

インターネット社会つてのはすごいもんです。セブリー舎ホームページを見て、北海道や青森からの参加もあるのですから、最初は驚きました。その他、千葉、埼玉、東京、神奈川、静岡、長野と広範囲です。リーダーの方もあるのでありがたい事です。

ところが、地元の山梨からは意外に参加者が少ないのです。地元ゆえ目新しくないのかも知れませんが、でも理由はそればかりでなく、ここ山梨は自然体験のイベントがものすごく多いのです。行政や大手自然体験活動事業団体の主催するものが安価にこなわれていますし、最近是一般企業が社会貢献活動の一環としてこの分野に侵出てきました。こんな強豪を相手に個人では太刀打ちできません。しかし、このためインスタクターとしての要請は格段に増えましたから痛し痒しつてところでしょうか。

自然体験活動を大きく分けると環境教育系と第一次産業系に分けることができます。

多くは自然観察や森林体験活動の環境教育系で、農業や林業の体験をする方は少し出遅れていると言った感じです。その中で山村密着型でやっているのは数えるほどで、セブリー舎はこの中に入ります。これらの区分はもし分ければと言う程度のことです。重要なことではありません。

自然体験活動の本質は体験することにあるのではなく、自然から、これからの自分たちの生活のし方や生き方を学ぶことにあると思うのです。ここにこそ活かされなければせっかくの体験がもつたいたないですものね。草花に接しても、農林水産業にせつしてもそれは変わらないことです。

では、セブリー舎は何をしようとしているかですが、ぼくは二十年間山村に暮らしてきて山村の暮らしの中にこそ人の生活の基礎があると感じました。その生活の基本はすべて自然界（ここでは森林）との関わりの中から生まれたものなのです。食べるための技術が生まれ、社会が出来て文化が生まれた。そして、それらは今日に至るまでの歴史があるわけです。

その歴史をひもとき、基本的な生活技術に触れ、時間と空間に身を置けば、これからの人間のあり方を考えることができると思うのです。それを考えるきっかけの場として、山村をフィールドとしたネイチャースクールをやりたいかっただのです。今までは一日のプログラムしか組めませんでした。

山村の生活を感じるには、浅、昼、夜の3点セットが必要だと思えます。最低でも泊できる環境が必要だと。

集落内に古民家は借りていましたが、法の規制があり実施できませんでした。が、特定小数を対象にすれば実施できることがわかりました。つまり会員制です。宿泊を目的としないで、山村生活の体験をするための古民家の利活用を目的にして、これに賛同した者が宿泊する形を取ればよいのです。

ぼくは古民家（主に茅葺き民家）の利活用に加えて修復・保存も目的に加えようと思っております。今まではこれらの古民家は大きな歴史的な価値があるとみられると、大きな資本をかけて修復・保存されていますが、ぼくはこれをネイチャースクールの中でやろうと考えたのです。こういうかたちをとれば、下高下集落にあるような普通の茅葺き民家もつぶさないですむかもしれません。

というわけで、今、その準備をしているところで、オープンに漕ぎつけたらお知らせします。

編集後記

この6月15日、日比谷野外音学堂へでかけた。40年振りぐらいだろうか。

憲法9条改悪反対の集会とデモに参加するためであった。そんなのノスタルジアだ、と言った友もいるけど。じじいばかりの千人のデモ、また行こう！